

第23回ピア・スーパービジョン：対談(柏木昭・田村綾子)「スーパービジョンの可能性」(聖学院大学総合研究所人間福祉スーパービジョンセンター主催 人間福祉学科・SW-net共催)

著者	相川 章子
雑誌名	聖学院大学総合研究所Newsletter
巻	Vol.29
号	No.1
ページ	31-32
発行年	2019-10-31
URL	http://id.nii.ac.jp/1477/00003739/

聖学院大学総合研究所 人間福祉スーパービジョンセンター主催
人間福祉学科・SW-net 共催

第23回ピア・スーパービジョン

対談：柏木昭・田村綾子「スーパービジョンの可能性」



対談者 左：柏木昭名誉教授 右：田村綾子教授

2019年2月2日（土）、聖学院大学4号館4階4402教室（第一会議室）にて「第23回ピア・スーパービジョン」（聖学院大学総合研究所人間福祉スーパービジョン主催・SW-net [聖学院ウェルフェアネット] 共催）が開催された。山田裕太氏（SW-net）総合司会のもとで、第一部は、柏木昭氏（聖学院大学名誉教授・当センター顧問）と田村綾子氏（聖学院大学心理福祉学部心理福祉学科教授・当センタースーパーバイザー）が「スーパービジョンの可能性」のテーマで対談され、第二部では第一部の対談を受けて、ピア・スーパービジョンとして参加者同士で実践を振り返る時をもった。スーパービジョンセンター委員会委員も含めて17名が参加した。

第一部は、田村氏により「スーパービジョン（以下、SV）の可能性」というテーマ設定の意図が冒頭に述べられて柏木氏との対談が始まった。とりわけの準備をあえてせず、「ここで、今」の思いを参加者と共有するというスタイルで進められた。互いのソーシャルワーカーとしての経験や、SV経験などを織り交ぜて話され、笑いがたびたびおきるようなあたたかい雰囲気の会となった。

田村氏は、SVの捉え方について、ソーシャルワーカーは自分を活用して支援するという場合に、自分が道具となる、その道具を定期的にメンテナン

スしていく必要がある、それがSVであると捉えている、と説明された。そしてテーマ設定の意図について、SVを広げていきたい、そのための方法や可能性について議論できればと考えていると話された。

それを受けて、柏木氏からまずSVの語義について考えたいと投げかけられた。SVという言葉は「上から目線で教え導く」と誤解されがちであるが、スーパーバイザー（以下、SVR）は、サポート（支持）に徹し、本当にスーパーバイザー（以下、SVE）が言いたいことを本音で言っているか、そういうかかわりを持って持っているかということが問われる。解決するのではなく寄り添い、共感することがキーワードであり、つまりSV関係はソーシャルワーク関係に非常に近いと述べられた。

これに田村氏は、職能団体主催のSVR研修の際に柏木先生からのSVを受けた経験について、支持されたことと同時に、尋ねられることによってさまざまな気づきがあったこと、またある種のクライアント的な経験に近い感覚を持ったことなどを話された。そこで、SVRとしてどうしてもSVEを育てたい、気づいて欲しいと思ってしまうのだが、と吐露された。

柏木氏からは、成長することは目的の一つではあるが、目的化してしまうとSVRは物足りなくなるのではないかと、その上でSVEがどう感じているのかについて話してもらうことが必要であるとした。ただそこを誘導するのが悩むことがある、と吐露された。そこで大切になるのは、胸襟を開いて、相手に通じる言葉で、ここで今、思っていることを伝えること（自己開示）が鍵になると述べられた。つまり、かかわりは本音を言える媒体であり、専門性につながるかかわりを持つとと話された。そのために演出していることもあると話された。しかし、一方でそのかかわりは「自由」であることも大切であり、そこが難しいところであると述べられた。

それを受けて、田村氏からは、確かに柏木氏からのSVで、SVEに影響をあたえたいといとしすぎると本来から外れてしまいかねない、自分がどうしたいか、何を考えて、何を言おうとしているのかにもっと集中したほうが良いということを学んだと話された。

途中、参加者に意味のある対談になっているのだろうかという田村氏の問いかけに対して、柏木氏は、僕は田村さんとういう話をしていこうかということだけを考えている。参加者がどういう意味を持って帰るか、考えるかは参加者が考えること、と答えられる場面があり、まさに、意図的に誘導しないSVの在りようを「ここで、今」共有することができた。

重ねて、柏木氏は、自分が何をしたいかを、きちんと意識できるかが問われている。SVEが抱えている課題が気持ちに移って行って進化する。SVRは的確にSVEの言葉を受けとることができるかどうかだと、誤れるSVとして、SVEの問いに答えてしまうSVRの例を挙げて話された。さらに、相手がどう思っているか、受け取っているかは一人一人との対話でしかわかりえない。つまりは相手がどう受け取ろうと自由である。こちらが伝えようとしたことをまったく誤って受け取っても構わない。大切なのは、おかしいなと考えること自体であると述べられた。

終始、「かかわり」の大切さ、教え導くのではなく支持（サポート）、解決ではなく共感、そのために、SVR（またはソーシャルワーカー）は胸筋を開いて自己開示をするということが話された。

フロアからは、クライアントはソーシャルワーカーの成長を待てない、失敗したら明日がないという場合もあるときにどうするのか？という当事者としての切実な問いが出された。またSVの可能性として、SVが広がって対人援助職者の専門性として根付いていけば社会がもっと良くなっていくのではないかの感想も出された。

第二部では、深瀬氏（SW-net）司会のもと、第一部の対談を受けつつ、参加者それぞれが現場で抱える課題や感じていることについて話された。現場では、慌ただしいなかで流されてしまい、一人で抱えて終わってしまうことがあり、結局支援

が我流になってしまうのではないかとことや、共感することや寄り添うことが大切であることはわかっているけれどもどうしてもできない自分を認められず、責めてしまうことなど、率直な現場の苦勞が出され、互いに自身の経験をもとにその工夫の緒を各自が見出していって行くようなピア・スーパービジョンの時となった。

最後に、当日運営に協力されたSW-netの皆様、総合研究所事務局の皆様にご心より感謝申し上げます。

（報告者：相川章子 [あいかわ・あやこ] 聖学院大学心理福祉学部心理福祉学科教授、同大学総合研究所スーパービジョンセンターセンター長）

本

書籍のご案内

お近くの書店、Amazon.co.jpからお買い求めいただけます。

人間福祉スーパービジョン ——ソーシャルワークを支える

柏木 昭・中村啓男 編著

2012年5月21日発行
2,800円（税別）

「スーパービジョン」および「スーパーバイザーの養成」の重要性を明らかにする。



<福祉の役わり・福祉のこころ>

「いま、ここで」のかかわり

石川到覚・柏木 昭 著

2013年3月15日発行
700円（税別）

柏木昭「特別講義・人間福祉スーパービジョン」を収録。



聖学院大学出版会 TEL:048-725-9801 FAX:048-725-0324
URL:https://www.seigpress.jp